

# 『九正易因』の成立をめぐる——『易 因』との関係を中心に——

永富 青地

一、はじめに

李贄（卓吾）の晩年に於ける最大の関心が『易因』の改定にあったことは、「友人に與ふ」において、

又た三年にして南都に刻する所の易因は、焦公以て精當と爲すと雖も、然れども余の心實に未だ了せず。……故に余仍ほ毎日の暇に於て、一卦兩卦を熟讀し、時時之を讀み、時時未だ妥からざる有れば、則ち時時自ら知るに當り、今又た已に十二卦を改正す。此れ一兩年の力に非ず。決して停妥し難し、是を以て未だ即ち死するに甘んぜざるなり。（1）

とあることから明らかである。ここではまだ『九正易因』という書名は、現われていないが、袁中道（小旂）の「李温陵傳」には、李贄が湖北省麻城の住居を焼かれた後、河北省通縣でのこととして、

初め公病むに、病中復た作りし所の易因を定め、其の名を九正易因と曰ふ。常に日はく、我れ九正易因の成るを得れば、死すとも快なり、と。易因成るに、病轉た基だし。（2）

と述べている。この後、投獄、自殺と續くので、『九正易因』は、彼の最後の著作ということになる。従って、『九正易因』の研究は、李贄の最晩年の思想を探る上で、ぜひ必要なのだが、今日に至るまでほとんど研究がなされていない。其の理由としては、現存する傳本が極めて少ないことが挙げられると思われる。

明清の書目類には、本書について記載のあるものが幾つかある。例えば、『千頃堂書目』巻一には、「李贄九正易因二卷」と記されているし、『經義考』巻五十五におい

ても、「李氏賢九正易因・四卷・存」とした後、「自序」の文の一部引用している。

しかしながら、現代に於ける、『九正易因』を実際に見ての研究としては、容肇祖氏が一九五七年に三聯書店より出版した『李賢年譜』の附録である「記李賢“九正易因”（李賢“九正易因”を記す）」と張建業氏が一九八一年に福建人民出版社より出版した『李賢評傳』（二三〇頁以下）があるのみであった。前者はわずか五頁の短いものだが、當時日本で實物を見る事が不可能であったため、資料として貴重なものだった。しかし、時代的な制約もあり、『易經』の註釋書であるというだけで『九正易因』に対して消極的な評価を行っているのは、再検討を要するようと思われる。後者も八頁ほどのもので、基本的な見解は容氏のそれと同じだが、より具体的な見解が見られるので、その説の當否については以下随時觸れていきたい。（3）

現代の目録類に於いて『九正易因』の所蔵が記されているものは、管見の限りでは、『中国古籍善本書目 經部』（上海古籍出版社、一九八九年）のみで、遼寧省圖書館と蘇州市圖書館での所蔵が記されている。筆者は一九九二年に、兩圖書館の関係者の御好意により、遼寧省圖書館蔵本については其の全文を、蘇州市圖書館蔵本についても、大有までを複写する事ができた。遼寧省圖書館蔵本は、全六冊、八行十八字。版心に「汲古閣」と刻されている。蘇州市圖書館蔵本は九行十九字。複写の範囲内では、出版者、刻工等を示すものはない。

なお、以下の考察においては、『易因』との比較を念頭に置きつつ論を進めることとしたい。

まず全體的な構成について述べると、遼寧省圖書館蔵本では、まず「讀易要語」があり、そのあと、王崇銘による序が附されている。この序文は、清世祖順治五（一六四八）年に記されたものである。ついで本文となっており、本文の後、大部分の卦の後に、張慎言（號菴山、萬曆三十七年の進士、崇禎帝の時に南京吏部尚書にまで登った）による評語が附されている。また、この遼寧省圖書館蔵本には、前述のように、版心に汲古閣と刻されているので、江蘇省常熟縣の毛晉の蔵書閣である汲古閣の蔵版であることも判るのである。

## 二、「九正易因序」について

蘇州市圖書館蔵本では、初めに李賢自身による「九正易因序」が置かれている。（4）そのあと、「讀易要語」、本文と続き、王崇銘の序や張慎言の評語はない。また、行間

に批点や評が附されているのも、蘇州市圖書館蔵本の特色である。まず、「九正易因序」の全文を示しておく。

李贄曰く、易因の一書は、蓋し予既に老ひ、復た白門に遊びて作る。時に天寒く夜永く、予臥して易を讀む者の易を説くを聴く毎に、既に心中解せざれば、輒ち慘然として楽しまずして曰く、これ豈に吾が孔氏の書ならんや、と。遂に「不■■（この後二字不明。）三年白門」、此の易因を就す。然れども其の妄誕笑ふべく、後人をして之を聴かしむるに、亦た當に予の前人を聴くが如くなるべし。因りて笈笥に封置して、直ちに濟北に上るに、易因梓せらる。反りて予をして轉側不安ならしむ。濟上に在りて、曰く、惟だ周易を是れ誦し是れ讀み、纔に一年にして、其の甚だ堪えざるを改むる所の者、幸ひに己に十の三を得たり。今馬侍御、又た予を携へて北に抵り、復た易を其の易を學ぶ所の精舍に讀む。侍御は通州の人、名は經綸、易を以て家を起こし、易に通ずと號す。予、既に幸ひに之を得、乃ち昼夜參詳し、纔に兩年にして、易因の舊者、存するもの一二なること能はず、改むる者且に七八に至らんとす。嗟乎、予、生平書を著はすを喜ばず。性質懶散なりと雖も、亦た既に作れば必ず成すを以て、復た中絶の理有ること無し。故に嘗て私に計るに、年老ひて以来、絶えて成らざるの書なる者無きに、獨り此の先聖の易のみは、恐惶するに定むること靡し。自ら謂らく、萬分に一も決して成す能はざるは、何ぞや、と。聖心の窺ひ難きは一なり。予、年已に老いたるは二なり。聰明遠ばざるは三なり。而れども卒に成るに底（いた）るは、豈に夫子在天の靈の之を黙して相（たす）くること有るに非ずや。然らずんば、何を以て或いは十日、或いは五日、或いは百十餘日にして其の曉るべからざる者、終歸（つひ）に曉り了るは何ぞや。迷へる時は千里萬里、曉る時は即ち目前に在り。固より知る、鬼神の將に通ぜんとするを。抑も或いは予の至誠を憫念するか。是に於いて、乃ち復た名を侍御に乞ふ。侍御曰く、此れ眞に孔氏の書なり、他時後日、吾が夫子に杏壇の上に就きて正すべし。夫れ樂は必ず九たび奏して後備はり、丹は必ず九たび轉じて後成り、易は必ず九たび正して後定まる。宜しく舊に仍りて易因と名づけ、九正の二字を加ふれば即ち得ん、と。予、喜びて之を受け、遂に汪本行をして復た讀ましむること一過、其の名を定めて九正易因と曰ふなり。（5）

以上の記述から、かれは白門（南京）において『易因』を執筆したものの、かなり早い時期から『易因』の内容について不満を持っており、馬經綸と出会う前にかかなりの程度

改定を進めていたと考えられる。また、通州に移ってから二年で『易因』の改正が終わったことを明言しているのは重要であり、後述の如く異説のある『九正易因』の成立年代を決定するものである。

### 三、「讀易要語」について

さて、蘇州市圖書館蔵本では、此の自序の後に「讀易要語」がある。内容的には、先程挙げた遼寧省圖書館蔵本のものとの字句の相違はない。ところで、「讀易要語」は従来、『李温陵集』の巻十一に所載のものが知られていた。しかしながら、『九正易因』のそれと『李温陵集』所載のものとの間に、かなりの字句の相違が在る。此の点については後述するが、それでは、『李温陵集』所載のものは何によっているのかというと、単行本『易因』所載のものによっている可能性が強い。現在日本では、『易因』は『續道藏』所載のものでしかみることができず、それには序文類は一切附されていないが、大陸には、かなりの数の単行本『易因』が現存している。筆者が實見したのは北京大學圖書館蔵本と、北京圖書館蔵本だが、いずれも「讀易要語」を載せている。そして、それは、『李温陵集』所載のもの、完全に一致するのである。

以下、蘇州市圖書館蔵本の「讀易要語」を、『李温陵集』所載のものとの相違に注意しながら示しておく。（なお、かっこ内は『易因』および『李温陵集』所載の「讀易要語」との相違点である。）

文王の彖辭爻辭（「爻辭」の二字はなし）は、其の言約にして其の旨深し。夫子の讀みて之を傳ふるに非ざれば、後の人終に得て讀むべからざるなり。唯だ夫子のみ易に於いて焉を終身す。是の故に、其の象を挙げ、其の義を指し、其の辭を陳ね、至聖の心を以て前聖の心に合し、而る後、戰慄するところの文理、燦然として詳明す。厥の功、大なり。夫子（下に「彖傳即所」の四字あり）以て文王の易（文王の下は「彖辭」）を註解すと謂ふと雖も可なり。後の人、又た何を以て賢せんや、夫れ唯だ賢有るを免れず。故を以て、夫子の傳明らかなれども復た晦し。賢に賢して已むこと無く、晦きに晦くして相仍り、易道大ひに喪はる。乃ち後の易を用ふる者、反りて其の訓誥する所を師とし、即ち以て眞の聖人の神化と爲す。自ら過ちに入りて、人の過ち寡きを欲す（「欲」「人」の間に、「教」の字あり）、亦た甚だしからずや。故に世の易を讀む者、只だ宜しく夫子の傳（「夫子」の下は「彖傳」）を取りて之を詳らかにすべく、必

ず其の易象（「神化」）の自然を得れば乃ち已む。然らずんば、寧ろ易を讀まざれ。醫方を誤述して、以て人を傷つくべからざるなり。然りと雖も、夫子當時に在りて、亦た已に文王の言（「象」）を知ること、至精至約なり。至約至精は、神聖に非ざれば、能く用ふることなし。是の故に、爻象傳（「象傳」）の外に復た六十四卦の大象（「象傳」）を爲りて、以て後世の君子を教ふ。余嘗て其の爻象（「象傳」）と倫ならざるを怪しみて、毎毎置きて讀まず。後思ひて之を得、乃ち知る、文王の憂患に深きを。故に六十四卦三百八十四爻に干いて（「六十四卦之辭」）專一に神聖の心事を發揮して、險に入りて後、悔ゆるに至らず。而して夫子復た大象（「中乘」）有言の教を擧げて、處莽なること余の如き者をして得て之を讀ましむ。亦た以て愆を省きて怨を寡くすべし。尤も分明に是れ余、中下の人爲に法を説けば、實に爻象（「象傳」）と倫ならず（この後「因稍稍取而並讀之」の八字あり）。嗚呼、聖に兩心無くして、人に上下有り。夫子と雖も其れ我を奈何せん。故に嘗て私に之を論じて曰く、易に六十四卦有り、是れ易の六十四大乾坤世界なり。易に三百八十四爻有り、是れ易の三百八十四小乾坤世界なり、と。一卦は自ずから一卦爲り。一爻は自ずから一爻爲り。一世界は自ずから一世界爲り。得て同ずべからざるなり。六十四卦の爻象（「象」一字）は專一に六十四位の神聖大人の事を發明せるなり。六十四卦の大象（「象」一字）は專一に六十四位の君子學人の事を發明せるなり。之を總ずれば（下に「則」の字が有り）、六十四（「一百二十八」）人有り。之を分かてば、則ち神聖なり、君子なり。兩途各々別有り。得て混ずべからざるなり。然れども、六十四位の神聖は、未だ嘗て此の六十四位の君子の事を爲すこと能はざるにあらず。而して六十四位の君子は、一神聖の影響を求むれども得べからざるなり。故に余、又た後の君子、神聖を以て法と爲すを要むるを願ふ。神聖に法る者は、孔子に法る者なり、文王に法る者なり。則ち其の餘は亦た法るに足る無きなり。（6）

ここにおいて、最も注目すべきことは、彼が易經全体の統一性を否定し、六十四卦、三百八十四爻に、それぞれ独立の価値を認めていることである。このような見方を進めていけば、當然、個別の事例の中にこそ、心の發現を見るようになる。周知の如く、李賢は、心学を極点まで推し進める一方で、『藏書』という膨大な歴史書を残している。それは、彼のこのような見方の当然の帰結であり、李賢はこのような形で、王守仁（陽明）の六經皆史論を受け継いだと思われるのである。（7）従って、後述のように、易

においても、文王の具体的な事跡の中にこそ、心の發現を見て行く事になるのである。このように、具体的な事象の中での心の發現を重視するならば、抽象的な卦辭より、より具体的な、大象を重視するようになり、それが、次の周易本文の配列にも影響していると考えられる。つまり、単行本『易因』、『九正易因』ともに、この「讀易要語」の後に各卦毎に周易本文と、それに対する李贄の評が付いているが、『易因』では周易本文の配列は、一般的なもののなのに対し、『九正易因』では、大象を最後にしているのである。また、文王の製作した卦辭、爻辭の重要性を認めつつも、かれ自身を含む中、下等の人間にとっては、孔子の製作した大象がなければ易は理解できないとしていることから、彼の大象重視の姿勢を知る事ができる。(8)

また、乾・坤兩卦では、『易因』が文言傳も載せているのに対して、『九正易因』では載せていないが、其の理由について、李贄は乾卦の附録に於いて次のように述べている。

李子曰く、乾・坤に文言を載せざるは、文言は宜しく自ら傳と爲すべくして、宜しく獨り乾坤兩卦を摘みてその他を遺し、以て聖人の經傳を破碎すべからざるを以てなり。未だ死せざるを待ちて尚ほ當に繫辭の奥を窮究すべし。但に文言を發明するのみにあらざるなり。然れども中間に亦た説の文言に及ぶ者有るは、蓋し儒先の連篇引類にして、復た之を裁剪せざるなり。(9)

但し、此の附録については、若干疑問がある。まず、自分を「李子」と呼んでいることだが、蘇州市圖書館蔵本では、諱の「李贄」になっている。(10) また、李贄の註釋は、本文の後にまとめて載せられ、附録には含まれないのに、なぜこの文のみが附録とされているかも疑問が残る。或は、李贄の他の著作から、後人が引用したか、とも考えられるが、疑問に止めておきたいと思う。

#### 四、註釋について

さて、周易本文の後、『易因』、『九正易因』ともに「天澤履」というような形で表題を挙げた後、李贄の註釋が有る。表題においても、上下の八卦の象によって考える点にも、彼の大象重視の姿勢は伺えると思われるが、『九正易因』では多くの場合、その下に小字で註が附されている。これは、『易因』には全く見られないものであり、比較の上からも注目されるので、以下にそのすべてを挙げておく。

屯卦 得象難

蒙卦	取象尤難問學至盡
需卦	得象
訟卦	難得象
比卦	取得象好
小畜卦	尤難得象
履卦	文王之卦
同人卦	取象大難亦文王之卦
豫卦	文王之卦也由豫而不知冥豫而不淪
隨卦	上文王之卦
蠱卦	亦文王之卦自然之象也
觀卦	平天下學問也
噬嗑卦	得象
賁卦	得象甚難
復卦	道問學
无妄卦	取象難
大畜卦	文王之卦
頤卦	文王之卦
大過卦	象十分險怪
坎卦	文王之卦
咸卦	取象最難勝於習聞者讀亦未必知
恆卦	學問事說得至透
遯卦	取象難亦文王之卦也
大壯卦	取象難
晉卦	此亦文王之卦
明夷卦	正文王之卦
家人卦	亦文王之卦
睽卦	得象難
蹇卦	與需大不
解卦	最難得象
損卦	象難取
益卦	取得象好

夬卦	險哉象
☱卦	此卦成象尤爲奇險
萃卦	與比不同
困卦	正文王之卦
井卦	亦文王之卦
鼎卦	象中更得象
震卦	卦言主豎文言問學
艮卦	問學大事
漸卦	象取得好
歸妹卦	得象
豐卦	險哉象文王當之
旅卦	文王之卦
兌卦	險哉象
渙卦	此卦極難取象今亦九正得十分矣
節卦	此亦難象今九正亦十分矣
中孚卦	險哉象
小過卦	最惡是此卦之象

以上の如く、注目すべき點は、取象の難易の表示を除くと、「文王之卦」としてあるものが尤も多く、十四條にも及んでいることである。ここにも、具体的な事跡の中で、心の發現を見る、というかれの姿勢を、窺うことができる。

次にまた注目すべき點は、表題の後に置かれた註釋に於ける相違点として、『易因』では、「方時化曰く」で始まっている例が、六十四卦中二十二もある（屯、訟、比、小畜、履、大有、豫、剝、離、恒、大壯、家人、夬、解、升、革、鼎、漸、豐、旅、巽、兌の各卦）ということである。

方時化は、字は伯雨、廣安の人であり、『易因』の成立にも深く関与していた事は、李贊の「易因小序」において、

今余、年七十四、偶々都下に遊び、焦弱侯先生と偕に南行するを獲たり。先生深く易道を明にし、其の徒、方時化なる者も亦易に通ず。先生、白下に家するを以て、即ち新安より家を徒し來りて先生に就きて以て居り、故を以て夜毎に輒ち會し、會する毎に輒ち講じ、講ずる毎に輒ち與に坐して聽きて、新たに得る有り。時化、又た輒ち其の徒、汪本<sup>17</sup>をして之を記載せしむ。（11）



と有る事からも、明らかである。また、『李卓吾先生遺書』（臺灣国立中央圖書館藏本）の附録に収められた、方時化と汪本<sup>17</sup>のそれぞれによる告文に拠っても、この事は確認する事ができる。

まず、方時化の「哭李卓吾先生文」では、

既に久しく先生に侍するや、先生の論圖先生と與に十翼を紹明するに値ふ。弟子、千古不破の疑有り、先生、千古無兩の識有り。弟子、竊かに漢儒の經を重んずるに倣ひて、誠を竭くし力を致す。然りと雖も、弟子即ち好を通ずるに託して、經術を詢ふや、先生、少しも昵する無し。弟子、日に先生を嚴ること父の如く、日に先生を奉ずること轍文孔子の如き所以なり。實に察すること曉曉たれば、愈々益々敬服するに、先生の心、皎日の如し。適頃は先生楚を去り燕に入れば、弟子、問ふこと久しく及ばざるなり。（12）

とあり、また汪本<sup>17</sup>の「卓吾先師告文」には、

憶ふに<sup>17</sup>、乙未の年、始めて師を龍湖に見る。……明年春、師、弱侯焦先生と共に白下に抵り、先生精舎を造りて以て師を居らしむ。時に方伯兩師、<sup>18</sup>家して往きて就學す。師困りて方師と日夜易を讀みて倦まず。白下の馬伯時先生、日に往きて正を讀ひ、聽きて夜分に至りて始めて散じ、<sup>17</sup>は傍より記載を作す人に過ぎざれども、易因梓す。庚子の冬、師又た易を黃柏山中に讀み、易因を改正す。適々馬誠所先生、北の通州より來たりて山中を訪ふ。越えて春二月、師、馬先生と共に通州に至る。既に至り、又た馬先生と易を讀み、卦毎に凡そ千遍、將に一年ばかりにならんとして、易因の改正成れり。名づけて九正易因と曰ふ。（13）

と記されており、これらの文から、李賢が白下（南京）において焦呖を中心とする易の研究グループと交流があったこと、方時化は通州での改定には参加していないことが判る。更に、庚子（萬曆二十八、一六〇〇年）の年に黃柏山で『易因』の改正を行い、その翌年に通州に移り、さらに一年後に『易因』の改正を終えて『九正易因』と名づけたとしているので、『九正易因』の成立は萬曆三十（一六〇二）年と推定される。（14）

また、従来、『易因』の著者について考察がなされた事は余り無いようであるが、以上の李賢及び其の周辺の人々の記録から、『易因』は方時化又は焦呖を中心とする易研究グループの成果をふまえた李賢の「編著」としての性格が濃いと考えるのではないかとと思われる。

ところで、『九正易因』においては、上記の冒頭の「方時化曰く」は、すべての卦

に於いて、削除されている。『九正易因』におけるこのような名前の削除は、恐らく、先程述べたように、編著としての性格の強い『易因』を、李贄個人の著作にしばらくあげようとした結果であったのであろう。また、名前の削除以外の註釋の修正も、個人の著作としての整合性を待たせる爲のものが多いと言えるのではないと思われる。

上引の「九正易因序」に「易は九たび正して後定まる。」とあることから、註釋の内容においても、大幅な改定があったことが當然予想されるが、上述の、個人の著作としての整合性を待たせるための改定を除くと、『易因』・『九正易因』の註釋の相違はそれほど目立たない。部分的に書き換えられた卦は多いのだが、書き換えによる思想の変化は必ずしも明白ではない。また、完全に書き換えられているのは、无妄、兌、節の三卦にすぎないのである。

これらの各卦の註釋が書き換えられた理由は、恐らく様々であり、必ずしも一つに括ることはできないと思われる。例えば、先程、全文が書き換えられたと述べた卦のうち、无妄の卦の註釋は、『易因』では「方時化日く」で始まっているので、恐らく全文方時化のものであった註釋を、李贄自身の物に差し替えたのだと思われる。その結果、方時化が無妄の卦名を説明して、

彼の天命は正にあらざと謂ふ者は妄なり。目中き有れば乃ち空中に華あるを見るなり。(15)

と、佛教の空華を用いている部分は、なくなっている。此の例に限らず、李贄が『九正易因』に於いて佛教用語をほとんど使っていないのは注目される。この事だけで、彼が儒教の正統に復帰したと速断できないにせよ、彼の著述の姿勢に変化があったことは十分考えられるのである。

また、兌の卦の註釋も『易因』では「方時化日く」で始まっているので、同様に方時化のものであった註釋を、李贄自身の物に差し替えたのだと思われる。この卦においては、方時化が徹底的に「師友之道」として解釋しているのに対し、李贄の方が經文にそったオーソドックスな解釋をしている。

それでは、自序において、「易は必ず九たび正して後定まる」とあったが、李贄が「九たび正し」たのはどこなのだろうか。そのことについては、李贄自身が記している。先に述べたように、各卦の註釋の表題の下のはほとんどに、小字で註が附されているが、渙卦では「風水の渙」とある下に、「此の卦、象を取ることに極めて難し。今亦た九たび正して十分を得たり。」とあり、節卦では「水澤の節」の下に、「此れも亦た象を取ることに難し。今九たび正して亦た十分なり。」とあるのである。

まず渙卦は、註釋の後半部がほぼ完全に差し替えられているが、思想的にそれほどの変化があるようには思われぬ。寧ろ注意したいのは、後半部で、ただ一つ差し替えられなかった文がある事である。それは、ほとんど末尾の、

此の卦は堯の舜を得、舜の禹を得、他は以て之に當るに足らざるを象る。

(16)

という文である。ほぼ全面的に書き換えられた後半部において、此の文のみが書き換えられなかったという事は、堯が舜を、舜が禹を得て禪讓したという事實との結びつきを重視する姿勢の一貫性が見られ、先程述べた、個々の事跡の中で、心が發現する、というかれの考えが、『易因』から『九正易因』に至っても、全く変わらなかった事を示していると思われるのである。

一方、節の卦は、全文が書き換えられているのであるが、此の書き換えは、明らかに、欲望の問題をめぐるなされている。もともと、節の卦においては、卦辭において「苦節、貞にすべからず。」(17)として、過度の節に固執してはならないとしながら、彖傳においては、「節するに制度を以てすれば、財を傷らず、民を害はず。」(18)として、制度による欲望の節制を肯定している。李賢は此の卦で上六の苦節について、

上は節に當らずして苦節す、是れ財を傷るにあらずして、是れ便ち民を害す。豈に聖人節するに制度を以てするの本意ならんや。聖人曰く、節は正理と雖も苦なれば則ち正と雖もまた凶、と。蓋し既に苦を以て貞と爲す、安んぞ能く悔いんや。故に曰く、悔い亡ぶ、と。之を尤むるなり、之に與するに非ざるなり。

(19)

と上六の「悔い亡ぶ」について、相当の曲解を取って行っている。此の解釋は、朱熹の『周易本義』における、「悔いありと雖も遂に之を亡ぼすを得たり。」(20)とはっきりした対照をなしており、死を目前にして猶、道学的リゴリズムへの激しい反感をあらわにしたものと思われる。

以上述べてきたように、『易因』を『九正易因』に書換た際、部分的な変更は多く見られたにせよ、このような彼の姿勢に変化は見られず、むしろ、『易因』におけるような他者の意見を削除した分だけ、それは鮮明になっているのである。(21)

## 五、附録について

また、『易因』『九正易因』共に、附録として先人達の注釈の引用が有るが、兩書と

もに、其の引用の体裁は極めてルーズである。以下に示した『九正易因』の附録に於ける引用のリストからもそのことは明白である。その際、人名は原則として諱で示し、それ以外の呼称による物は括弧内に示しておいた。また、[]内は『易因』における引用数と比較しての増減である。

王畿	二十五回
熊過	二十三回(熊過十六回、熊南沙七回) [- 2]
蘇軾	二十三回(坡公十五回、蘇子瞻六回、蘇氏一回、蘇長公一回) [- 1]
楊簡	十五回(楊簡十二回、楊敬仲三回) [- 3]
王弼	十三回(すべて王輔嗣) [- 1]
程頤	十回(程正叔五回、程子三回、程傳二回) [+ 2]
金真亨	八回(すべて金汝白) [- 1]
楊萬里	九回(楊廷秀八回、誠齋楊氏一回)
劉濂	五回(すべて劉澹伯)
胡炳文	六回(胡仲虎四回、雲峯胡氏二回) [+ 4]
蔡清	五回(蔡介夫四回、蔡濟二回) [- 2]
鄭玄	四回(すべて鄭康成)
吳澄	四回(吳幼清二回、吳氏一回、吳澄一回)
許伯羔	三回
焦屹	三回(すべて焦弱侯) [- 1]
來知德	三回 [+ 1]
楊雄	二回(すべて楊子雲)
羅倫	二回(すべて羅彝正)
石介	二回(すべて石守道)
干寶	二回(すべて干令升)
虞翻	二回(すべて虞仲翔)
丘國富	二回(すべて丘行可)
周宴	二回 [- 2]
陸伯載	二回 [- 1]
邵寶	二回(すべて邵國賢) [- 1]
汪本評	二回 [+ 1]
李鼎祚	二回

愈氏 二回

司馬光 二回(司馬光一回、涑水司馬氏一回) [+1]

莊周(莊子)・李贄(遼寧省圖書館藏本では李子)(『易因』では夬卦に「李秃翁」註あり)・朱熹(朱子) [-2]・説文・楊時(楊中立)・班固(班孟堅)・卜商(卜子夏)・馮煥(馮奇之)・呂祖謙(呂伯恭)・姜寶(姜廷善)・張獻翼(張幼子)・焦廷壽(焦輯)・呉子儀・薛亶(薛君采)・陸佃(陸師農)・向秀(向子斯)・李舜臣(李子思)・代蘊之・荀況(荀子)・薛仁貴・魏徵(魏玄成)・諸子相 [-1]・范大性 [+1]・丁氏留玄 [+1]・進齋徐氏・王昭素・蔡汝楠(蔡子木)・劉牧(劉長民)・馬融(馬季長)・王實(王德卿)・徐鉉 [+1]・劉用相 [-1]・胡瑗(胡翼之)・方時化 [-1]・禮記 [+1]・晁説之(晁以道) 以上各一回(なお、『九正易因』では、『易因』で二回あった游酢(すべて游定夫)の引用がすべて削られ、陳搏(陳圖南)・邵雍(邵堯夫)・周敦頤(周茂叔)・丘濬(丘仲深)・鄭曉(鄭望甫)・趙汝樸・楊繪(楊元素)・王守仁(王伯安)・項氏の各一回の引用も削られている。)

例えば、蘇軾の『東坡易傳』からの引用では、「坡公」としてあるものの外に、「蘇子瞻」としたり「蘇氏」「蘇長公」などもよばれている。このような不統一は恐らく、『易因』執筆の際、焦竑を中心とする易研究グループの人々が収集した資料を、体裁の統一をしないまま附録として収めた爲に生じたものであり、『九正易因』もその不統一を引き継いでいるのだと考えられる。此の兩書では、引用数に若干の増減が有るが、いずれにおいても、王畿の『大象義述』からの引用が非常に多いのは注目される。このことは、李贄が個人的に王畿と接觸があったのみならず、思想的にも大きな影響を受けたことを表わしており、先程述べた、經文における大象の独特の配列にも、王畿の大象重視の影響を受けている可能性があることを示唆するものである。

## 六、終わりに

最後に、『易因』から『九正易因』への改定の持つ意味を考えて、本稿の結びとしたい。前述の如く、此の改定には、二つの目的があったと考えられる。一つは、共著としての性格の強い『易因』をかれ個人の著作にする事であり、もう一つは、個々の事跡の中でこそ心が發現する、という彼の主張をより鮮明にする事である。この点、彼は最後

まで心學者であった。ただ、それでも李贄が最後まで易という經書にこだわったことはやはり注目されるのであって、ここに、当時の心學者たちの中で大學解釋が大きな問題であったのと同じ様に、易解釋もやはり大きな問題であったことが看取できる。それはまた、明の易解釋の研究の必要性を促すものであるが、それとともに經學と心學の關係の問いなおしにも向かうはずのものである。

#### 註

- (1) 又三年南都所刻易因、雖焦公以爲精當、然余心實未了。・・・故余仍於每日之暇、熟讀一卦兩卦、時時讀之、時時有未妥、則時時當自知、今又已改正十二卦矣。此非一兩年之力。決難停妥、是以未甘即死也。（『續焚書』卷一、中華書局、一九七五年、三九頁）
- (2) 初公病、病中復定所作易因、其名曰九正易因。常曰：「我得九正易因成、死快矣。」易因成、病轉甚。（『焚書』、中華書局、一九七五年、四頁）
- (3) 一九九二年に北京で開催された明代學術思想討論會において容氏は、氏の使用された中國社會科學院哲學研究所藏の『九正易因』は文革の際失われたと述べられ、筆者もその方向で研究を進めてきたが、文革後一九八一年に出版された前記の張建業著『李贄評傳』は二三一頁において、「中國社會科學院哲學所圖書室現存明抄本《九正易因》二卷（共八冊、一至四冊爲第一卷、五至八冊爲第二卷）、可能是李贄原著。」としている。この抄本は、容氏が使用したのと同じのものと思われるので、事實とすれば容氏が使用した『九正易因』は現存することになる。筆者は本稿執筆に當り、社會科學院に問い合わせを行ったが、返答は得られなかった。また、前記『中國古籍善本書目 經部』には社會科學院の藏本については記されていないなど、疑問が残る。この點については後日の調査を待ちたい。（同じく一九八一年に出版された張立文・黎明哲編『中國古代哲學者評傳』第三卷（齊魯書社）の「李贄」の項には、「《九正易因》舊抄本 藏中國社會科學院哲學研究所圖書館」とあるが、具体的な説明はない。）なお、中國社會科學出版社から一九九一年に出版された任繼愈主編『道藏提要』では、一一六四頁の『易因』の項に於て、「是書、又名《九正易因》、分上下經三卷。」としているが、『易因』と『九正易因』を同一のものとするのは、明らかな誤りである。また、『九正易因』については、王重民撰

『中國善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年）や林其賢著『李卓吾事跡繫年』（文津出版社、一九八八年）の『易因』の項目にそれぞれ言及があるが、『九正易因』を実際に見た上でのものではないので、ここでは省略した。

- (4) 『李贄評傳』によれば、社會科學院藏本の「九正易因序」は「有殘頁、殘字」だという。
- (5) 李贄曰、易因一書、蓋予既老、復遊白門而作也。時天寒夜永、予每臥、聽讀易者說易、既心中不解、輒慘然不樂曰、此豈吾孔氏之書也哉。遂不圖三年白門、就此易因。然其妄誕可笑、使後人聽之、亦當如予之聽前人也。因而封置笈笥、直上濟北、而易因梓矣。反使予轉側不安。在濟上、日惟周易是誦是讀、纔一年、所改其甚不堪者、幸已得十之三。今馬侍御又携余抵北、復讀易於其所學易之精舍。侍御通州人、名經綸、以易起家、號通於易。予既幸得之、乃晝夜參詳、纔兩年、而易因之舊者、存不能一二、改者且至七八矣。嗟乎、予生平不喜著書。雖性資懶散、亦以既作則必成、無復有中輟之理也。故嘗私計、年老以來、絕無不成之書者、獨此先聖之易、恐惶靡定。自謂、萬分一決不能成、何也。聖心難窺一也。予年已老二也。聰明不逮三也。而卒底於成、豈非夫子在天之靈有默相之耶。不然、何以或十日、或五日、或百十餘日、其不可曉者、終歸曉了何也。迷時千里萬里、曉時即在目前。固知鬼神將通。抑或懷念子之至誠也。於是、乃復乞名於侍御焉。侍御曰、此真孔氏之書矣、他時後日、可以就正吾夫子于杏壇之上矣。夫樂必九奏而後備、丹必九轉而後成、易必九正而後定。宜仍舊名易因、而加九正二字即得矣。予喜而受之、遂令汪本復讀一過、而定其名曰九正易因也。
- (6) 文王彖辭爻辭、其言約其旨深。非夫子讀而傳之、後之人終不可得而讀也。唯夫子於易終身焉。是故、舉其象、指其義、陳其辭、以至聖之心、合前聖之心、而後彖畫文理、燦然詳明。厥功大矣。雖謂夫子以註解文王之易可也。後之人、又何以贅為、夫唯不免有贅矣。以故、夫子之傳、明而復晦。贅贅無已、晦晦相仍、易道大喪。乃後之用易者、反師其所訓誥、即以爲眞聖人之神化。自入于過、而欲人寡過也、不亦甚與。故世之讀易者、只宜取夫子之傳詳之、必得其易象之自然乃已。不然、寧不讀易。不可誤述醫方、以傷人也。雖然、夫子在當時、亦已知文王之言、至精至約。至約至精、非神聖莫能用矣。是故、于爻彖傳之外、復爲六十四卦大象、以教後世之君子。余嘗怪其與爻彖不倫、每每置而不讀。後思而得之、乃知文王之深于憂患也。故于六十四卦、三百八十四爻、專一發揮神

聖心事、不至入險而後悔。而夫子復學大象有言之教、俾幽莽如余者、得而讀之。亦可以省愆、而寡于怨。尤分明是爲余中下之人說法、實與爻象不倫也。嗚呼、聖無兩心、人有上下。雖夫子、其奈我何。故嘗私論之曰、易有六十四卦、是易之六十四大乾坤世界也。易有三百八十四爻、是易之三百八十四小乾坤世界也。一卦自爲一卦。一爻自爲一爻。一世界自爲一世界。不可得而同也。六十四卦之爻象、專一發明六十四位神聖大人人事也。六十四卦之大象、專一發明六十四位君子學人事也。總之、有六十四人。分之、則神聖也、君子也。兩途各別。不可得而混也。然六十四位神聖、未嘗不能爲此六十四位君子之事。而六十四位君子、求一神聖之影響、不可得矣。故余又願後之君子、要以神聖爲法。法神聖者、法孔子者也。法文王者也。則其餘亦無足法矣。

- (7) この問題については、小島祐馬「李卓吾と六經皆史」（『支那學』第十二卷五號所載、一九四七年）および島田虔次『中國における近代思惟の挫折』（筑摩書房、一九七〇年改訂版）第三章註六十七、山下龍二『陽明學の研究 成立編』（現代情報社、一九七一年）第二章（七）「六經論」を参照のこと。
- (8) 『李贄評傳』では『九正易因』におけるこのような周易本文の排列について、「李贄認爲象、爻辭是文王所作、故列前」としているが、『九正易因』における大象の重視を見落としているように思われる。また、『九正易因』における大象の重視については、後段も参照のこと。
- (9) 李子曰、乾坤不載文言者、以文言宜自爲傳、不宜獨摘乾坤兩卦而遺其他、以破碎聖人之經傳也。待未死、尚當窮究繫辭之奧。不但發明文言而已。然中間亦有說及文言者、蓋儒先連篇引類、不復裁剪之矣。
- (10) 『李贄評傳』はこの附録の文を引用しているが、「李子（または李贄）曰」の部分省いているので、社會科學院藏本ではどのようになっているかは不明である。
- (11) 今余年七十又四矣、偶遊都下、獲僑焦弱侯先生南行。先生深明易道、其徒方時化者、亦通易。以先生家白下、即自新安徙家來就先生以居、以故每夜輒會、每會輒講、每講輒與坐而聽焉、有新得。時化又輒令其徒汪本訂記載之。  
（『李溫陵集』卷十一、文史哲出版社一九七一年影印本）
- (12) 既久侍先生也、值先生與弇園先生紹明十翼。弟子有千古不破之疑、先生有千古無兩之識。弟子竊傲漢儒重經、竭誠致力。雖然、弟子即託通好、詢經術、先生無少昵焉。弟子所以日獻先生如父、日奉先生如藝文孔子。實察曉曉。愈益



敬服。先生心如皎日。適頃者先生去楚入燕、弟子間久不及也。

- (13) 憶<sub>レ</sub>乙未年始見師于龍湖。・・・明年春、師同弱侯焦先生抵白下、先生造精舍以居師。時方伯兩師<sub>レ</sub>家住就學焉。師因與方師日夜讀易不倦。白下馬伯時先生日往請正、聽至夜分始散、<sub>レ</sub>不過從傍作記載人、易因粹矣。庚子冬、師又讀易於黃柏山中、改正易因。適馬誠所先生自北通州來訪山中。越春二月、師與馬先生同至通州。既至、又與馬先生讀易、每卦凡千遍、將一年所、而易因改正成矣。名曰九正易因。
- (14) この點については鈴木虎雄『李卓吾年譜(下)』(『支那學』第七卷第三號所載、一九三四年)及び前記『李贄評傳』を参照の事。なお、容肇祖『李卓吾評傳』(商務印書館、一九三六年)及び前記『李贄年譜』は「將に一年ばかりにならんとして」とある(容氏の引用する『李溫陵外記』本では「近一年所」)のを一年未満として、『九正易因』の成立を萬曆二十九年(一六〇一)年の事としているが、『易因』の改正に通州到着後あしかけ二年を要したことは李贄自身が前記の自序において明記しており、萬曆三十年とするのが妥当と思われる。
- (15) 彼謂天命匪正者、妄也。目中有<sub>レ</sub>香、乃見空中有華也。
- (16) 此卦象堯之得舜、舜之得禹、他不足以當之。
- (17) 苦節不可貞。
- (18) 節以制度、不傷財、不害民。
- (19) 上不當節而苦節、不是傷財、便是害民。豈聖人節以制度之本意哉。聖人曰、節雖正理、苦則難正亦凶。蓋既以苦爲貞、安能悔也。故曰、悔亡。尤之也、非與之也。
- (20) 雖有悔而終得亡之也。
- (21) 前記『李贄評傳』では『九正易因』においても若干の方時化、汪本<sub>レ</sub>等の見解を記している事について、「李贄在自己的著作中、保存了其弟子的解釋、說明他是能虛心接納別人的見解、也表現了他一貫主張的“師即友”的思想。」としているが、李贄が『易因』から『九正易因』への書き換えにおいて、上記の如く彼らの意見を大量に削っている事を見逃している。また『李贄評傳』では『九正易因』の註釋のうち特色あるものとして、乾卦と蒙卦を挙げているが、そのことにも疑問が残る。まず乾卦について『李贄評傳』では、『九正易因』の「是故一物各具一乾元、・・・人人各正一乾之元也、各具有是首出庶物之資

也」とある文を引いて、「李贄從《乾卦》引出的這一命題、強調人人平等、人人皆聖、具有強烈的反封建壓迫反傳統思想的戰鬥意義。」としているが、均しく聖人に至る可能性を所有するという意味での「平等性」は、朱子學以來承認されているもので、李贄の註釋の特色とすることはできないと思われる。（この點は『李贄年譜』も同様である。）蒙卦についても、時中について「聖人與童蒙無異矣。」としていることから同様の結論を導きだそうとしているが、おそらく「童心説」あたりを念頭に置いたのであろうが、これのみではやはり無理があるように思われる。

- ※ 本稿の執筆にあたり、韓錫鐸（遼寧省圖書館副館長）、潘文東（蘇州大學外語系講師）の兩氏より資料面で多大の恩恵を受けた。末尾ながら感謝の意を表する次第である。